

慶應義塾大学医療系三学部合同特別実習  
美濃地域診断実習  
報告書

実習期間

2026年2月21日(土)～2月28日(土)

メンバー

看護医療学部2年 菅野歩花  
環境情報学部1年 高橋理緒

ファシリテーター

看護医療学部3年 小林ひな

## 1. 事前準備

- 7月1日(火) 初顔合わせ@zoom
- 1月19日(月) 事前調べ学習の情報共有、今後の流れの確認@zoom
- 2月5日(木) 事前調べ学習の情報共有、今後の流れの確認@zoom
- 2月10日(火) 宿泊所の選定、事前調べ学習の情報共有、今後の流れの確認@zoom
- 2月21日(土)～ 現地実習参加

## 2. 実習のスケジュール

- 2月21日(土)  
19:00-20:00 美濃人交流会
- 2月22日(日) 終日  
うだつの上がる街並み散策
- 2月23日(月)  
14:30-16:00 美濃和紙の里会館見学  
16:00-18:00 吉田さんインタビュー
- 2月24日(火)  
17:30-21:00 岐阜県在宅医療地域連携体制構築援助事業研修会
- 2月25日(水)  
8:30-12:00 訪問診療の同行
- 2月26日(木)  
11:45-16:00 ベンチづくりワークショップ
- 2月27日(金)  
12:00-13:00 美濃地域発表会  
13:00-17:00 総合在宅医療クリニック、医療型短期入所 かがやきキャンプ見学
- 2月28日(土)  
帰京

## 3. 美濃市での活動

### 3.1 産業

#### 1) 和紙専門店への訪問

##### 【日時】

2月22日(日)14:00～15.00

##### 【場所】

Washi-nary, NIPPONIA

##### 【内容】

美濃市の伝統産業である美濃和紙について理解を深めるため、和紙関連事業者である辻晃一氏(Washi-nary)へのヒアリングを行った。

辻氏は「『和紙』が入口ではない」という考えのもと、和紙製品の販売に加え、古民家を改装した宿泊施設の運営を行っている。かつて和紙は、情報を記録する媒体や住宅資材として広く利用され、卸問屋を通じて流通する「インフラ」としての役割を担っていた。しかし、時代の変化によりその需要は大きく減少し、従来のビジネスモデルでは成立しにくくなっている。

さらに、美濃市は地理的に、名古屋市や岐阜市を經由し、高山市へ向かう観光客の通過点となりやすい位置にある。そのため、観光客が立ち寄ったとしても滞在時間が短く、宿泊や消費といった形で地域に十分なお金が落ちにくいという課題がある。

そのような状況の中で、辻氏は地方創生の観点から和紙に着目し、単なる製造業としてではなく、観光や宿泊と組み合わせた事業展開を行っている。また、従来の卸売中心の流通構造に対し、インターネットを活用した直接販売へと転換することで、高付加価値・低量販売による収益性の向上を図っている。

さらに、製造から販売までを一体化する「製造小売業(SPA)」の考え方を取り入れ、従来の分業型の産業構造からの脱却を試みている点も特徴的であった。

##### 【感想】

今回のヒアリングを通して、和紙の伝統や歴史の価値を学ぶというよりも、和紙産業および地域の衰退という現実を突きつけられたように感じた。

また、辻氏の「和紙を入口にしない」という言葉について、当初は和紙そのものの魅力を前面に出さないという意味で捉えていたが、話を聞く中で、和紙はあくまで地方創生のための手段として位置付けられているのではないかと感じた。

すなわち、「和紙が美濃を魅力的にする」という方向性ではなく、「美濃は和紙が有名である」という事実を起点として、それをどのように活用するかという発想であると理解した。

このような考え方は、伝統産業を守るという視点とは異なり、地域資源をどのように再解釈し価値を生み出すかという、より実践的かつ現代的なアプローチであると感じた。

## 2) 和紙漉き体験

### 【日時】

2月23日(月)14:00～19:00

### 【場所】

美濃和紙の里会館

### 【内容】

美濃和紙の製造工程を理解するため、和紙すき体験を行った。

和紙の主原料である楮(こうぞ)は、清流に浸した後、煮る・ほぐすといった工程を経て、紙すきに使用できる状態になるまでに約2週間を要する。このように、紙すき以前の工程に多くの時間と手間がかかる点が特徴である。

紙すきの工程では、すき舟に水を張り、トロロアオイという植物の根から得られる粘液「ねべし」と、楮の繊維を混ぜ合わせた液を使用する。この「ねべし」によって繊維が均一に分散され、和紙特有の薄くて丈夫な構造が生まれる。

体験では、無地の和紙、落水紙、葉書など複数の種類から選択することができた。特に落水紙では、紙をすいた後にシャワーなどの水流を当てることで、繊維の配置が変化し、模様をつけることが可能であった。この工程により、紙そのものにデザイン性を持たせることができる点が印象的であった。

### 【感想】

今回の体験では、粘度の高い液体が、すく・乾かすといった工程を経ることで紙へと変化していく過程を実際に体感することができ、非常に興味深かった。特に、素材の状態から最終的な形へと変化していく様子を肌で感じることで、和紙がどのように作られているのかを実感を伴って理解することができた。

また、落水紙のように工程の中でデザインを加えることができる点から、和紙は単なる素材ではなく、製造過程そのものに創造性が含まれていると感じた。

一方で、この体験を通して、和紙とは異なる製法で作られる洋紙はどのように生産されているのかという疑問が生じた。日常的に使用している紙との違いを比較することで、和紙の特徴や価値をより深く理解できるのではないかと感じた。

## 3.2 医療・福祉

### 1) 武儀医師会 岐阜県在宅医療地域連携体制構築援助事業研修会

#### 【日時】

2月24日(火)19:30～21:00

#### 【場所】

関市保健センター

### 【内容】

医師・看護師・薬剤師・ケアマネジャーなど多職種計67名が参加していた。本研修会は、在宅医療の現場において患者の症状を的確に把握し、緊急度を判断した上で医師に報告・相談できるような「共通言語」を多職種で学ぶことを目的として開催された。

研修では、『医療職のための症状聞き方ガイド』（医学書院，前野哲博編，2019年）をもとに、講義やグループワークが行われた。特に、患者の病歴聴取におけるポイントや医療者間での情報共有の重要性について重点的に学習した。

また、患者役や医師役に分かれて寸劇形式で行うグループワークが実施され、方言の強い患者を演じる場面では会場に笑いが生まれるなど、参加者同士が親しみやすい雰囲気の中で進められていた。グループワークでは、講義で学んだ内容をもとにロールプレイを行い、実践的な学びを深めていた。

### 【感想】

研修会の終了時や休憩時間には、互いに挨拶や雑談が交わされており、多機関間での交流が活発に行われていた。このことから、本研修会は単なる知識習得の場にとどまらず、地域や多職種間のつながりを強化する機会となっていると感じた。

このように、定期的開催される研修会は、多職種連携の強化につながると考える。医師・看護師・保健師・介護職などが顔の見える関係を築くことで、情報共有や連携が円滑になり、患者に対して包括的かつ切れ目のない支援が可能になると考えられる。

さらに、研修会終了後には、学生3名で岐阜県の名物である「岐阜タンメン」をご一緒させていただいた。食事中にはクリニックの理事長から施設の活動について話を伺うことができ、後日、施設見学の機会をいただくこととなった。この経験から、人とのつながりが新たな学びの機会につながることを実感した。

## 2) 訪問診療の同行

### 【日時】

2月25日(水)8:30～12:30

### 【場所】

総合在宅医療クリニックみの

### 【内容】

8時30分よりZoomを用いて他事業所のスタッフとのミーティングおよび申し送りが行われ、その後9時30分から訪問診療が開始された。学生は2グループに分かれ、それぞれ訪問診療に同行した。

午前中は約3件の患者宅を訪問した。訪問診療では、Zoomを活用したオンライン診療が行われており、情報通信技術（ICT）を用いて業務の効率化や診療の質向上が図られていた。

### 【感想】

オンライン診療やZoomを活用した他事業所とのミーティングなど、地域医療においてICTが積極的に活用されていることが印象的であった。医師がその場になくても対応が可能となるため、オンライン診療は今後の地域医療においてさらに重要な資源になると考えた。

また、訪問先では生活や趣味に関する雑談を交えながら会話が行われており、患者が話しやすい和やかな雰囲気が作られていた。このような関係性があることで患者の思いや希望を把握しやすくなり、その人らしい生活を支える医療の実現につながっていると感じた。

### 3)リハビリ施設の見学

#### 【日時】

2月27日(金)13:00～17:00

#### 【場所】

総合在宅医療クリニック、医療型短期入所 かがやきキャンプ見学

#### 【内容】

プールを活用した「無重力デジリハ」と呼ばれる先進的なリハビリテーションを行っているところを見学させていただいた。水中の浮力を利用して身体への負担を軽減しながら、デジタル技術を組み合わせることで、子どもが主体的に楽しく身体を動かせる環境を提供しており、従来のリハビリを補完しつつ、運動量の確保や意欲の向上を目指している。

また、施設に隣接する「かがやきロッジ」では、子ども食堂や地域イベントなどが開催されており、地域住民との交流の場として機能している。これにより、障がいのある子どもと地域社会との接点を生み出し、相互理解を促進する役割も果たしているとのことであった。

#### 【感想】

施設内は、子どもたちが安心して過ごせるよう、親しみやすいイラストが配置されているほか、空間同士が緩やかにつながる構造となっており、「一人の時間」を確保しつつも「孤独」にはならないよう配慮された、あたたかみのある環境であると感じた。このような環境設計は、子どもの心理的安全性を高め、安心して活動に取り組める要因の一つであると考えた。

実際に、プールを活用したリハビリテーションを見学させていただいたが、水温がやや高めに設定されていることで身体への負担が軽減されており、子どもたちがリラックスしながら楽しそうに活動している様子が印象的であった。その姿から、リハビリを「訓練」としてではなく、「楽しい体験」として捉えられるよう工夫されていると感じた。また、プール施設においても、段差の配置や移動のしやすさ、さらにはプロジェクターを用いた視覚的な刺激など、子どもが安全かつ主体的に活動できるよう多角的に配慮された設計となっており、その細やかな工夫に驚かされた。これらは単なる設備ではなく、子どもの発達や意欲を引き出すための重要な要素であると学んだ。

今回の見学を通して、環境づくりそのものが支援の一環であり、子ども一人ひとりの特性やニーズに応じた空間設計の重要性を実感した。

### 3.3 自然

#### 1) ベンチ作りワークショップ

##### 【日時】

2月26日(木)12:00~16:30

##### 【場所】

誕生山

##### 【内容】

今回のベンチ作りワークショップは、「総合在宅医療クリニック」の職員数名と、岐阜県立森林文化アカデミーの卒業生2名、講師1名が主体となって企画・実施している単発の活動であり、私たち学生3名はそこに加わる形で参加を希望し、混ぜていただいた。

ベンチを自ら作る活動を発足するに至った経緯を紹介する。活動の案は、「総合在宅医療クリニック」の「かがやきベンチ」を運営している医療法人である「かがやきベンチ」の名にちなんで、職員の方が発案した『自分たちで木を切るところからベンチを作ってみよう』という考えから始まったそうだ。

今回の活動は、山の中から木を選び、チェーンソーで木を切り倒し、製材し、ベンチという製品として加工するところまで数ヶ月にわたって行われるものである。今回のワークショップは、山の中で木を切り、製材所に持って行って木を整える過程を見守るところまでを行った。製材の過程に関しては、地域で一軒しかない製材所に大きな丸太をトラックで運び、重機を使って切断の様子を見学した。製材所で勤務する方は、「若い世代がこうやって林業に興味を持ってくれて嬉しい。」とおっしゃっており、岐阜県立森林文化アカデミーの方は「地元の山を活用して役に立つものが作られて嬉しい。大好きな地元の山で、地元の皆さんと何か共同でできないだろうかと考えていた。とてもわくわくしている。」とおっしゃっていた。

##### 【感想】

活動を通して特に印象的だったのは、木に対して暖かく思いのこもった想いを馳せる方の姿と、ベンチを通して人々の交流が生まれる未来を想像する人々の姿である。

今回、林業に精通する人物として活動を支える主軸となっていたのが、岐阜県立森林文化アカデミーの卒業生・A氏であり、A氏は美濃市の地域おこし協力隊としても勤めている人物だ。A氏は、常に木、山、そして自然に対して敬意を払っており、木一本一本がどのような人生を辿ってきたのか、どのような思いでこの地に生えていたのか、ということを考えていらっしやう。まるで木を人間かのように大切に扱っている姿が印象的だった。今日の物流や商品販売の過程を鑑みると、木材を使用した製品が大量流通しつつも、その木材が作られる過程でどのような人々がどのような気持ちで向き合ってきたのか、また、木がどのような思いで育ってきたのか、ということまで想いを馳せる機会はなかなかないのではないかと思う。今回のワークショップを通じ、林業と深く向き合っている林業、そして木に対して熱い情熱を向ける方の話を聞いたり、向き合い方を肌で感じたりすることにより、私たちは林業の現状や林業に携わる人の活動、思いを知ることができ、日常生活の中での物事に対する感じ方が変化したり、世の中の捉え方や自身の思考が発展したりする。一方で、林業に携わる人や地域の人にとっては、地域の関係人口が増えたり、林業・地域に興味を持つ人が増えたりするという面があり、双方にとって利点がある機会だったと思う。ワークショップを通

し、人と人の新たなつながりが生まれ、様々なところで新たな発見があり、価値観や思考の発展があり、たくさんの感謝が生まれていた。

また、ベンチを通して人々の交流が生まれる未来を想像する人々の姿も印象的だった。ベンチを設置する予定の場所で勤務している「総合在宅医療クリニックみの」の職員らは、切断したばかりの丸太をベンチに使用する長さに調整する場面で、何人がけの椅子が良いか、どのような会話が生まれ、どのようにベンチが愛されていくだろうかということ想像しながら丸太に腰掛けていた。多くの人の交流の場となるであろうベンチが誕生する第一歩に立ち会うことができ、光栄だった。

## 4. 全体のまとめ

本実習を通して、美濃市における地域のあり方を考える上で、「つながり」という言葉がキーワードだった。今回の実習では、産業、医療・福祉、自然といった多様な分野に触れたが、それぞれに共通していたのは、人と人との関係性の中で価値が生み出されているという点であった。

まず、産業の分野においては、美濃和紙という伝統産業が、単なる製造業としてではなく、観光や宿泊と結びつくことで新たな価値を創出しようとしていた。そこでは、和紙そのものの価値だけでなく、それをどのように地域と結びつけ、どのようなストーリーに仕上げるかが重要視されており、産業と地域、さらには人をつなぐ取り組みが行われていた。

医療・福祉の分野では、多職種が連携しながら患者を支える体制が構築されており、顔の見える関係性が質の高い支援を実現していることが印象的であった。医師や看護師、介護職などが互いに情報を共有し、日常的にコミュニケーションを取ることで、患者一人ひとりに対して切れ目のない支援が可能となっていた。このようなつながりは、単なる制度や仕組みではなく、人と人との信頼関係に支えられているものであると感じた。

自然を活かしたベンチづくりの活動では、地域の山や木といった資源を活用しながら、人と人との新たな交流が生まれていた。林業に関わる数少ない人々の、「森が好き」という熱い思いや、地域の中で何かを共に作り上げようとする姿勢からは、関係人口の創出や地域への関わり方の広がりを感じることができた。このような活動は、単に物を生み出すという領域を超え、人々の価値観や意識にも影響を与え、新たなつながりを生み出していると考えられる。

これらの経験を通して、美濃市では、特別な仕組みや大規模な投資だけで地域が成り立っているのではなく、日常的な会話や交流といった小さなつながりの積み重ねが、地域全体を支える基盤となっていることを実感した。また、人口減少や産業の衰退といった課題を抱えながらも、地域に関わる人々が主体的に行動し、つながりを生み出し続けている点に、この地域の可能性を感じた。

以上のことから、地域づくりとは単に資源や制度を整えることではなく、「人と人とのつながりをいかに生み出し、それを持続的に育てていくか」という営みであると理解した。今回の実習を通して得たこの視点は、今後他地域を考える上でも重要な指針となるだろう。

## 5. 活動を振り返って

### 5.1 菅野歩花(看護医療学部2年)

本実習を通して私が考えたことは、「ある人にとっての当たり前は、誰かにとっては当たり前ではない可能性がある」ということである。美濃市は、美濃市駅から徒歩10分ほどの場所にある「うだつの上がる街並み」が特徴的であり、長年にわたって大切に保存され、愛されてきた歴史的建造物群からなる街並みと自然が融合した景観は大変美しく、私は実習期間中毎日見惚れていた。車や電車、人が行き交う雑多な音に囲まれる生活から離れ、静かで落ち着いた場所で過ごす日々は特別感があり、穏やかな気持ちで生活することができた。関わってくださった方々や宿泊する宿にも恵まれ、ホスピタリティを享受することもできた。しかし、このような感じ方は“初めて来る土地で、短期間の滞在と限定された生活”を送っていたから感じたことなのかもしれない。美濃市は、飲食店などのチェーン店があまり進出していないという特徴がある。それらの店や大型量販店に行くためには、車で数十分かかる隣町などに足を伸ばす必要がある。私たちは食材や日用品を自ら調達して生活を続ける必要性に迫られていなかったため感じなかった不便さを、半永久的に生活している人は感じているのかもしれない。一方で、美濃市で暮らしている人にとっては当たり前だと感じる“人と人のつながりの濃さ”が、他の地域で暮らす私たちにとっては当たり前でなく、羨ましいと思う場面もあった。人は、ある土地で同じような暮らしを長年続けていると、自分の当たり前を「普通」なものとして認識し、他の人から見たら羨ましがられたり尊敬されたりする点も気づかなくなっていくのかもしれないと思った。「ある人にとっての当たり前と別の人にとっての当たり前」や「ある人にとって羨ましいと思う部分と別の人にとっての羨ましいと思う部分」が違うことがあるからこそ、違う環境で生活している人同士が交流したり、互いの生活圏に入って生活をしてみたりするという経験は有意義であるといえる。また、それらの経験を通して新たな環境や価値観に触れることにより、自身の価値観や考えがアップデートされることに繋がる。さらに、それらの気づきが新たな価値や社会資源の創造につながっていくのではないかと思った。

また、地域の特徴を語るには、現地に行って実際の環境に触れたり、人々と交流を重ねて関係を構築し、様々な話をしたりしてからでないと十分に語るができないということを感じた。私たちは、現地に行って調査をする前段階として、インターネット上の情報をもとに事前調査をしていた。しかし、産業、教育、医療、福祉など分野ごとに情報を収集しても地域の特徴を掴み切ることはできず、特徴を捉えきれないまま現地に足を運ぶこととなった。さらに、実際に現地に足を運んでお店の方とお話をしたり、地域の方々と広く関わる方とお話したり、幼い頃から地元に住んでいる方の話と移住してきた人の話を聞いて比較できるところは比較してみたりすることにより、美濃市について現地の人々がどのように捉えていて今後どのような未来を想像しているのか、また、現地の人から見た「美濃市」の良さや改善したいところはどのような点かということを知ることができた。事前調査から導かれる地域についての考察はあくまで仮説であり、考察者の主観にすぎない。考察者がこれまで経験してきたことや価値観が考察の前提として大きく関与している可能性がある。これは、前述した「ある人にとっての当たり前と、別の人にとっての当たり前は異なる」という観点にも通じることである。今後地域に関する調査を実施する際には、以上の点に留意して活動を行うとともに、より多くの人と交流し、多角的な視点から事象を捉えることを意識していきたいと考える。さらに、今回美濃市で得た経験や考えを大切に持ち続け、今後行う様々な活動に活かしていきたいと考える。

## 5.2 高橋理緒(環境情報学部1年)

本実習を通して、私は地域との関わり方に対する認識が大きく変化したと感じている。これまで私は、将来的に都市部で働くことを前提としていたため、地方の課題は自分とは直接関係のないものとして捉えている側面があった。しかし、美濃市での経験を通して、地域は必ずしも「そこに住む人だけのもの」ではなく、多様な関わり方が存在することを実感した。

特に印象的であったのは、都市と地方を行き来しながら活動している方の存在である。今回関わらせていただいた密山先生は、平日は都市部で診療を行いながら、週の一部を美濃で過ごすという二拠点生活をされていた。このような働き方は、地域に継続的に関わりながら、自身の専門性も活かすことができる柔軟なものであり、都市と地方の双方の価値を活かすあり方であると感じた。

また、近年はリモートワークの普及により、地方が二拠点生活の拠点として選ばれる事例も増えているとされている。こうした変化を踏まえると、地域との関わりは「住むか住まないか」という二択ではなく、「どのように関わるか」という選択へと広がっているのではないかと考えるようになった。今回の実習で見聞きした取り組みも、地域に関わる人の多様な関係性の中で成り立っている側面があり、そのような関わり方の広がりが地域の可能性を支えていると感じた。

このような視点に立つと、地方創生においても、観光のような一時的な関係だけでなく、継続的に地域と関わる人をどのように増やしていくかが重要になると考えられる。その中で、二拠点生活は有効な選択肢の一つであり、働きながら地域に関わることを可能にする仕組みとして、今後さらに注目されるのではないかと感じた。

以上の経験から、私は都市で働くことと地方に関わることは両立し得るものであり、その両者をつなぐ視点を持つことが重要であると考えようになった。今後は、自らの専門性を活かしながら、特定の地域に限らず多様な地域と関わり続けることのできるあり方を模索していきたい。

## 5.3 小林ひな(看護医療学部3年)

私が今回の実習に参加しようと思ったきっかけは、昨年度に参加した稚内市での本プログラムが非常に有意義であったため、今回も参加したいと考えたからである。稚内市では主に住民の健康課題に着目して調査を行ったが、今回は事前に具体的な地域課題を設定するのではなく、美濃市の代表的な産業である和紙や、うだつの上がる町並みを中心に、実際に現地を訪れて地域全体を把握し、地域診断を行うことを目的としていた。

その中で、私は本実習を通して美濃市の強みに気づくことができた。一つ目は「人と人とのつながり」である。町のパン屋が地域住民の悩み事をつなぐ“情報屋”のような役割を果たしていたことや、美濃人交流会のような住民同士が関われる場が存在していること、さらに公園で気さくに話しかけてくれる住民がいたことなどから、日常生活の中に自然な関係性が築かれていることを実感した。都市部ではマンションの隣人の顔も知らないことは珍しくなく、私自身もそのような環境で生活している。それと比較すると、美濃市では人と人との距離が近く、自然な見守りや支え合いが生まれていると感じた。

二つ目は「危機感と地域への強い思い」である。実習の中で聞いた「それくらいね、美濃市も消滅都市なんです。」という言葉が強く印象に残っている。人口減少という現実を受け止めながらも、和紙という伝統文化を守り活用しようとする人々や、「自分たちがなんとかしなければ」という当事者意識を持って地域活性化に取り組む人々に多く出会った。これらの姿から、数値では測ることのできない「地域を守りたい」という思いそのものが、美濃市の大きな強みであると感じた。私は、このような思いを持つ人々がいる限り、美濃市の未来は決して暗いものではないと実感した。

また、実習に付随する学びとして、経費申請における領収書の取り扱いについても学ぶことができた。本実習では交通費および宿泊費が大学から支給されるが、領収書の記載方法には細かな規定があった。私たちは事前に十分な確認を行わないまま領収書を発行してしまい、その結果、大学の学生課や宿泊施設に再発行などの対応をお願いすることとなり、手間をかけてしまった。この経験から、事前確認の重要性を実感するとともに、今後同様の機会があった際には適切に対応したいと考えた。

## 6. 発表資料



### メンバー紹介

たかはし りお  
将来は二拠点生活したい  
地方創生ってすてきなと...

かんの あゆか  
美濃和紙きれい！  
家のどこに飾ろうかな～  
生クリームわらび餅まだまだ食べたいなあ♡  
木が使われているお家が多くてステキ

こばやし ひな  
静かで綺麗な街並みだなあ  
人が温かいなあ  
ごはんうま～  
(美濃市じゃないけど、  
岐阜タンメンまた食べたいな...)



八幡宮でパワーを  
感じさせていただきました♪

# 本プログラムの概要

## 目的：

フィールドワークによる対話や観察を通じて地域の「見えない課題」や「強み」を発見し、学部を越えた多様なメンバー間で学び合う

## 特徴：

- ・多様な専門背景を持つ学生と地域に入り、対話と観察を通じて地域の「見えない課題」や「強み」を探る
- ・地域住民との共同生活を通じた濃密な学び
- ・事前学習・現地実習・報告発表まで一貫したプロセス
- ・地域の現状を分析し、実践的な提案へとつなげる

## 地域診断とは

「地区活動を通して地域課題を明らかにし、個人のケアに留まらず、集団あるいは地域を対象にケアを行い、地域課題を軽減・解消していくプロセス」

出典：公衆衛生ガイドライン(2011)

地域の人と交流し、食べ物、暮らしを体験する



地域（美濃）について自分たちなりに捉える



地域のこれからを私たちに考える

1週間という短い期間

## 調査の全体的な流れ

### 2025年 6月 参加者決定

- ・・・美濃市での滞在と調査を希望し、自主的に応募しました。
- ・・・メンバーは学年も学部も違う3人。  
今回のプログラムへの参加をきっかけに知り合った仲間です。

——各自美濃市について関心を持ったことを調べ、期待を高める——

### 2026年 1月 事前調査

- ・・・美濃市の強みや課題を予想する

### 2月 現地で調査

- ・・・1週間美濃市に滞在し、地域の雰囲気を感じつつ住民の方と交流

### 3月～ 調査のまとめ

## 藤沢市

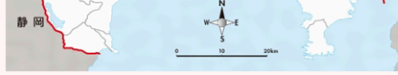


看護医療学部キャンパス



環境情報学部・総合政策学部キャンパス（湘南藤沢キャンパス）

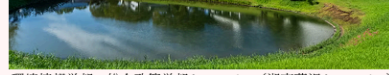
# 藤沢市



**勝手にシンドバッド**



**サザンオールスターズ**



環境情報学部・総合政策学部キャンパス (湘南藤沢キャンパス)

## 美濃市



総人口: 17,780人  
 面積: 約117km<sup>2</sup>  
 主産業: 和紙、農業、小規模商業  
 高齢化率: 高い  
 山と川に囲まれたコンパクトな市

## 藤沢市



総人口: 443,986人  
 面積: 約70km<sup>2</sup>  
 主産業: 商業、観光、サービス業  
 首都圏ベッドタウン  
 海と都市が共存

→美濃市は、観光地？生産地？過疎地？  
 「掴めない町だなあ」というのが、調査時の正直な感覚でした

## 参加したイベントを通しての学び

2月21日 (Day1)

### 美濃人交流会



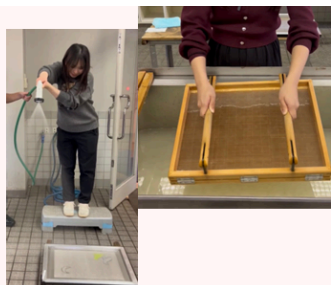
- ・ 医師、職人、販売者、主婦、経営者など様々な方と出会った
- ・ 住民同士の交流や繋がりを肌で感じた
- ・ 地域の人々で繋がろう・互いに知ろうとする意欲を感じた
- ・ 地域の外の人間（私たち）を優しく受け入れ、手を差し伸べようとしてくださる温かい心に安心した
- ・ 二拠点生活やダブルワークの方の生活を知った

# 産業

2月23日 (Day3)

## 和紙漉き体験 @和紙の里会館

- ・美濃和紙の歴史と製造工程について学ぶ
- ・伝統的な産業を身近に感じることができた



↓松久永助紙店にもお邪魔しました  
紙が丈夫な日用品になることに驚きました



Washi-nary HPより引用

2月22日 (Day2)

## 和紙専門店 Washi-nary訪問

- ・和紙×地方創生

# 医療・福祉

2月24日 (Day4)

## 医師会主催の勉強会

- ・ 症状の聞き方のポイントを学ぶ
- ・ 多職種間での「共通言語」を学ぶ
- ・ ロールプレイを含むグループワーク
- ・ 地域で働く多職種のつながりを実感



2月25日 (Day5)

## 訪問診療の同行

- ・ zoomを用いた他事業所とのmtg
- ・ 訪問先でのオンライン診療の見学
- ・ 訪問診療の実際を見学
- ・ 和やかで患者さんが話しやすい雰囲気でした



# 自然

2月26日 (Day6)

ベンチ作りワークショップ



6日間の実習を通して考えたこと

街の中のつながり・地方創生・地域共創

私たちが考える、美濃市の**強み**とは

小さい町だからこそその“**つながり**”

**危機感**と地域おこしへの**熱い想い**

## 美濃市の今後に向けて



パンフレットを作りました  
使っていただけると嬉しいです

*Thank you for listening!*

医療法人かがやき 総合在宅医療クリニックみの  
院長/プロデューサー 密山要用 先生 および スタッフの皆様  
和紙専門店Washi-nary オーナー 辻晃一 様  
一般社団法人KASANE 理事 吉田理恵 様  
町屋ゲストハウス 宿木 管理人 様  
美濃地域の皆様

以上の方々のご支援とご協力に心より感謝申し上げます。

## 7. 謝辞

本実習を行うにあたり、大変多くの方にご支援いただきました。皆様のおかげで、実りある実習を行うことができました。以下の方々に心より深く感謝申し上げます。

医療法人かがやき 総合在宅医療クリニックみの  
院長/プロデューサー 密山要用先生 および スタッフの皆様  
和紙専門店Washi-nary オーナー 辻晃一様  
一般社団法人KASANE 理事 吉田理恵様  
町屋ゲストハウス 宿木 管理人様  
美濃地域の皆様

(順不同)